

当たり前だった日常

平島小学校

六年

立石^{たていし}

佑葵乃^{ゆきの}

(敬称略)

私のおじいちゃんは、声を発することができません。なぜならば、おじいちゃんは、がんになり、手術で声帯を切ることになってしまったからです。だから、おじいちゃんと会話をするときには、持っている紙に文字を書いています。

私が保育園のときは、ひらがなを書いたり読んだりすることが難しかったので、とても大変だったと思います。しかも、おじいちゃんは紙に字を書くので、書くのにとっても時間がかかります。小さいころの私は、書く時間が待てず、「なんでこんなにおそいのだろう」という気持ちでした。ですが、今では、そのことをおじいちゃんの「個性」だと思っているのでもとも思いません。しかし、やっぱりおじいちゃんといると私は、周りの声が気になってしまいます。そんな中、おじいちゃんは、あんまり気にしていなさそうなのですごいなあと思いました。

私は、二ヶ月に一度ほどおじいちゃん・おばあちゃんの家に行きます。毎回会いに行くことがとても楽しみです。家に行くとおじいちゃんやおばあちゃんが「大きくなって」とほめてくれます。その言葉に私は、「私も成長しているんだなあ」と実感がわき、とてもうれしい気持ちになります。そして、おじいちゃん・おばあちゃんの家の近くに小学校があるので、よくおじいちゃんといっしょに小学校に行きます。学校に遊びに行ったときは、よく鉄棒をして遊びます。空中逆上がりや空中前回りなど成功するとおじいちゃんがたくさん拍手をしてくれます。とてもうれしい気持ちになり達成感を感じます。おじいちゃんと遊んでいるとすぐに時間がたち、もう帰る時間になってしまい、車に乗ります。車に乗ると、おじいちゃんたちが出てきて、声が出るおばあちゃんは「ばいばい」と言ってくれます。しかし、おじいちゃんは、声が出ないので手をたくさんふってください。手をふってくれるおじいちゃんの姿を見ると、さみしい気持ちにもなりますが、すぐくうれしい気持ちにもなります。

これからは、おじいちゃんみたいな人がいたら目の届くはんいでお手伝いできたらなと思います。障がいをもった人たちとたくさんお話がしたいので、私は、指文字や手話、点字などを練習しています。耳の聞こえない人が、耳の聞こえない人に手話をする、聞こえない人が「手話ができる

の!？」と、とてもおどろいた顔をしてよろこんでくれます。

このように、相手の立場を考えて、みんながよろこんでもらえる行動ができたらなと思います。そして、次は、私がおじいちゃんによるこんでもらえるような行動をとり、もっともっと幸せにしたいと思います。